

秀康卿越前に封ぜられし後、阿閉掃部とて、武功の譽ある者を厚祿にて抱えられけり。秀康卿の老臣狛伊勢が嫡子に鑑の着初させける時、掃部を招待し、愚息に武功の物語聞かせ給へと乞ひけるに、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見たりとて、志津嶽の戦に青木新兵衛と槍を合せたる始末を語りけるに、其頃狛伊勢がもとへ心安く出入する青木芳齋といふ浪士あり。其日も勝手に居たりしが、此物語を聞きて、勝手よりにじり出で、掃部に向ひ、鑑のおどし馬の毛色を一々云ひければ、掃部驚きつゝ盃を芳齋にさし、是を驗しにとて腰の脇差を引きけり。それより芳齋が名國中に高く成り、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出さる。一伯殿筑紫へ左遷の時、掃部はいかになりけん、芳齋は先祿にて加賀へ招かれ、夫より、直に仕へて、子孫相續して今にあり。といへり。平次按ずるに、新兵衛天正十八年北條攻の時も戦功あり。太閤記卷十二北條征伐山中城攻の段に、右の谷を見れば、大母衣かけたる武者二騎行きしが、それにおしつゞきあまた搦手へ乗入る。二人はやがて首捕りて御本陣へ持参し、御目にか

候へば、物はじめよしとて、金銭の貫首をといて被下けり。其姓名を尋ねれば、青木新兵衛とかや云々。とあり。又關屋政春古兵談に、奥州福嶋にて正宗と景勝衆攻合ひ、能き働衆岡左内・青木新兵衛才伊豆・永井近江・渡部右衛門・北川傳衛・同土佐守・鈴木彦九郎、上下五十騎許にて、福嶋城より一里許出での事也。岡左内、正宗と太刀打す。才伊豆、馬より切つて落さるゝといへども、青木新兵衛助合ひ、討死一人もなし。後景勝より左内を越後守に任じ、錦の羽織と團扇を被下。とあり。右働衆の内なる才伊豆も、後に吾が藩士と成りたり。三州志鍵礎餘考にも、才伊豆は初め上杉家の士にて、小田切庄左衛門といふ。松川合戦に青木新兵衛など、武功の士なり。といへり。又混見摘寫に云ふ。青木芳齋は、もと景勝にて青木新兵衛といふ。後浪人して越前に居たり。語つて曰く、浪人もの武具多く持ちたるは、何の役にも不立。其居たる所をかへ候時分も、俄に拂ふとて捨拂ひ也。又跡に残し置くも如何なるものもといへり。御宿越前は、以前は勘兵衛といひし。大坂に秀頼公へ召出され、越前と改稱す。是は焼捨てたりといへり。

とあり。

○駿河町

芳齋町の邊に駿河町と云ふ町名あり。昔小幡駿河と云ふ人の居邸あり。故にしかいふと。但し此の事詳かならずと龜尾記にいへり。此の町名今はなし。

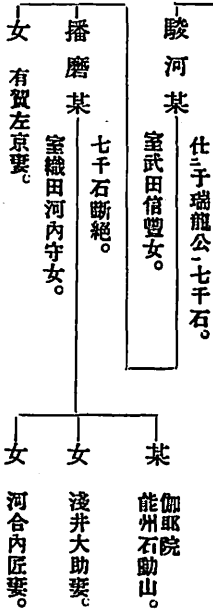
○小幡駿河傳

加陽諸士系譜に、小幡駿河の祖父は、上野國峯城主小幡尾張守と云ひ、父は小幡彈正と云ふ。駿河某瑞龍公奉仕、賜七千石、其子播磨某家相續、賜七千石處斷絶。播磨子能州石動山伽耶院爲住職。二女有。一女淺井大助妻、一女河合内匠妻。とあり。按ずるに、元和元年の土帳に、七千石小幡播磨とありて、寛永四年の土帳には其の名見えず。既に斷絶せしにや。加陽諸士系譜に左の如く記載す。

小幡氏

尾張守某
上野國峯城主。

彈正某



○播州血屋敷傳話

昔金澤に小幡播磨とて大身の士あり。多くの家人を召仕ひ、有福に暮しけり。殊に大祿を賜はり、大身の事ゆゑ、家に持傳ふる重器珍物多き中にも、殊に自愛せられし南京の皿拾枚あり。或時珍客を招待せられ饗應ありしに、右秘藏の皿を出されしに、勝手向取扱ひける菊といへる下婢、はからずも右の皿をばあやまつて取おとし、一枚破壊したり。主人殊更自愛せられし秘藏の皿なりといへども、いたしかたもなく、其身は勿論、傍輩の人々までも種々訛言なすといへども、主人播磨の立腹甚だしく、遂に彼の下婢をば手討になし、露地なる井戸の中へ死骸を投込みたりしが、其夜より毎夜深更に死靈出で、皿の數を取しらべ、泣出し消失せけり。然るに右菊の恨みならんか。主人播磨不首尾成事出